

琉球大学学術リポジトリ

自閉症児を育てる母親の「子ども理解」と育児効力感の関連

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2013-05-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 志麻 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25934

自閉症児を育てる母親の「子ども理解」と育児効力感の関連

金城志麻*

Relation of Mothers' Child understanding and Parenting self-efficacy

Shima Kinjo

問題と目的

1. はじめに

これまで、障害児を育てる母親のストレス等の育児困難感についての研究報告は多くなされており(橋本, 1980; 中塚, 1984; 新美・植村, 1980; 田中, 1996など), 障害種別では自閉症児を持つ親は, ほかの障害児をもつ親よりもストレスが高いという結果が指摘されている(Hastings&Johnson, 2001; Tobing&Glenwick, 2002; 植村・新美, 1985, 渡部・岩永・鷺田, 2002など)。自閉症とは, アメリカ精神医学によるDSM (Diagnostic and Statistical of Mental disorders) によると第一軸の「通常, 幼児期, 小児期, または青年期に初めて診断される障害」における広汎性発達障害(pervasive developmental disorders)に位置付けられている(DSM-IV)。自閉症の基本的特徴は3歳ぐらいまでに症状があらわれ, 対人相互反応の質的な障害, 意思伝達の著しい異常またはその発達障害, 活動と興味の範囲の著しい限局性の3つを主な特徴とする行動的症候群である。

自閉症児の親のストレスが特に高い要因として, 上記のような自閉症特有の認知障害, 発達の不均衡さから生じる行動障害や情緒的交流の困難さが指摘されている(永井・太田, 1987; 夏堀, 2001)。さらに, 自閉症は医学的に早期診断が可能なダウン症や脳性まひと異なり, 行動特性をもとにその診断や報告がなされるために, 母親がわが子の障害を受容するまでの期間が長期化し, 育児不安も好転・増悪が交替的に出現しやすいことも自閉症児を持つ母親のストレスの要因とされている。

以上のように自閉症児の子育てには, ストレスを高める要因が多く存在する。しかし, 発達障害児の子育てを支援する実践的な心理臨床学的研究は立ち遅れているのが現状である。

発達障害児の子育て支援に着目した金城(2002)

は, 障害告知前後の時期である幼児期では, 発達障害に起因する困難性ゆえに我が子を理解することや, 関わることの困難性を抱えるため, 発達早期の発達障害児を育てる母親に対する「子ども理解」を促進する要因を明らかにすることは重要と述べた。さらに, 自閉症児における母親の「子ども理解」について金城(2010)は, 自閉症児の母親が子どもの新たな行動面について気づくことで, 子どもにとって自己が求められている存在であると感じることができるとする。その一方で, 子どものネガティブな感情面に視点が向く場合は, 子どもと関わる上で効力感を得ることができず, 子どもと関わる上での難しさを感じると指摘した。そのため, 母親が子どもの行動の背景にある様々な意図や感情といった内的状態に視点を向けることが, 「子ども理解」につながり, 育児期効力感の向上に繋がると考えられる。子どもの行動の背景にある様々な意図や感情といった内的状態に視点を向けるためには, 乳幼児の段階から子どもを既に「心」を持った存在と捉え, 子どもの言動の背景に存在する「心」を豊かに帰属させて理解しようとする必要があると考えられる。その傾向をMeins(1997)は, Mind-Mindednessとし, 母親がMind-Mindednessを持つことが, 安定的な愛着関係を構築することにつながると述べている。

しかし, 言葉の発達に困難性を有している自閉症児に対して母親がMind-Mindednessを働かせて関わることは, 通常の子育てより難しいと考えられる。そのため, 育児に対する効力感も低下することが懸念される。育児効力感とは, 育児役割においてうまくやっていくことができるかという, 親としての能力に対する自信である(Coleman&Karraker, 1997)。育児効力感についての研究は全般的に少ないが, 育児効力感が育児に対する個人的な満足感や適応, そして親が子どもに与える事のできる心理的または物理的環境の質を理解するための変数として

* 琉球大学教育学部

重要であることが明らかにされている。つまり、育児効力感は、育児に関する達成能力を左右し、その結果、子どもの行動と発達に影響を与えるものであると解釈できる。

以上のことから、自閉症児の子育てにおいて、「子ども理解」と育児効力感の関連性について検討することは、自閉症児の母親に対する子育て支援に有用な知見を提供できると考えられる。また、小学校高学年頃の子どもは、第二次反抗期を迎える時期であり、この時期は子どもが身体的・社会的な課題に直面する重大な時期にもあたるため、親のかかわりが難しい時期である。そのため、これまでの子育てでは難しくなり育児効力感も低下することが懸念される。そのため、幼児期から児童期にかけて「子ども理解」のプロセスを検討することは重要と考えられる。

2. 本研究での目的

自閉症児を持つ母親がどのような視点で「子ども理解」と育児効力感の関連性について検討することを目的とする。その際、幼児期から児童期といった子どもの成長過程に応じて「子ども理解」の視点の変容についても検討する。

予備調査

1. 目的

自閉症児の母親の「子ども理解」の視点について検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者

自閉症の児童を持つ母親 1 名(母親40歳, 子ども10歳)である。

調査内容

インタビュー形式により、以下の2点について質問を行った。その際、子どもの幼児期の頃を想起して答えてもらうよう教示を行った。

- ① 幼児期の育児はどのようなものだったか。また、どのようなことが大変だったか。
- ② 大変だと思ったときでも育児を続けられたきっかけはどのようなものだったか。

3. 結果

(筆者の発言については「 」, 対象者の発言については「 > 」で示す。)

①就学期前の育児について

「就学期前の育児はどのようなところが大変でし

たか。」

「子どもを保育園に入れる前から、手の振り方に異常が見られ、不安を感じていた。」

②育児を大変だと感じたときに育児を続けることができた要因について

「子どもと言葉を交わすことができなかつたときは、どんな時に育児を楽しいと思うことができましたか？」

「小さい頃は、笑った顔はもちろんのこと、とにかく表情の一つ一つが愛おしくて、それだけかわいいと思えた。今は成長して顔つきもだいぶ変化したが、その分行動で愛おしさを感じることができる」

4. 考察

今回の調査対象者である自閉症児は、言語発達の遅れが見られなかった。そのため、児童期では子どもとの会話や行動面においてのやり取りがあげられていた。しかし、発語があまり見られない幼少期においては、子どもの表情によって子どもへの愛情を感じており、子どもの表情などを通して育児に対する原動力を得られていた。以上から、本研究では「子ども理解」を、子どもの感情・行動についての推測と定義する。また、「子ども理解」を行う際の視点として、非言語情報と言語情報に焦点をあてる。

方法

1. 調査対象者

A県B市に通う小学校高学年(10～12歳)の自閉症児を持つ母親7名(母親の平均年齢42.3歳, 子どもの平均年齢10.3歳)である。

2. 材料

母親の育児効力感を測定するため、育児効力感質問紙を用いた。育児効力感質問紙は、「子どもへの積極的関わりへの自信」「子どもを安堵させる自信」「子どもを自己統制させる自信」の3因子から構成されている。また、育児を一つの領域とみなしてその領域における自己効力感を測定するParental Self-Agency Measure (PSAM: Dumka et al., 1996)との妥当性、信頼性が確認されている(田坂, 2003)。育児効力感質問紙への回答は、7件法によるものである。質問項目はTable.1に示した。

3. 手続き

半構造化面接を行った。その際、子どもの幼児期

Table.1 育児自己効力感因子項目

第1因子 子どもへの積極的関わりの自信
1. 子どもとしっかり遊んだり、あるいは話をすることで、子どもの気持ちを満足させている
3. 子どもはあなたのことをよく遊んでくれる遊び相手あるいはよき理解者であると思っている
6. 子どもにあったいろいろな遊び方で関わっている
9. 子どもがまねをできるようによいお手本を見せている
11. 忙しい時でも子どもと関わることができる
14. 子どもの行動や表情には敏感に反応している
第2因子 子どもを安堵させる自信
2. 子どもが自信がつくようによいところは褒めている
5. 子どもがぐずった時、あるいは言う事を聞かない時に、なだめている
7. 子どもが不安そうにしているとき、言葉をかけて安心させている
10. 子どもが機嫌の悪い時には落ち着いて話をすることが難しい(R)
13. 子どもが泣きだした時、私が関わることで泣きやむ
第3因子 子どもに自己統制させる自信
4. 子どもに我慢させるべきことは我慢させられる
8. 子どもがどうしても言う事を聞かない時には、子どもの要求通りにしてしまう(R)
12. 子どもが聞き分けのない時には、何を言っても無駄だと思う(R)

Rは逆転項目を表す

このころの育児場面を想起してもらいやすいよう配慮し、調査を行う前に、幼児期の子どもの様子について聞き取り調査を行った。面接の質問項目については、以下の4点である。

- ① 幼児期の「子ども理解」：感情・行動をどのように理解したか。
- ② 児童期の「子ども理解」：感情・行動をどのように理解したか。
- ③ 育児困難感：今までの育児がうまくいかなかったと感じた場面について。
- ④ 育児困難場面に対する対処法：うまくいかなかった場面における対処法について。

さらに、半構造化面接終了後に、育児効力感質問紙への回答を求めた。

結果

1. 半構造化面接で得られた結果の処理

半構造化面接で得られた内容に関しては、逐語のプロトコルを作成した。質問①～③に関しては、予備調査を基に非言語的情報、言語的情報というカテゴリーへの分類を行った。質問④に関しては、「子ども理解」に対する推測の有無に基づいて分類を行った (Table.2)。

幼児期および児童期の「子ども理解」における言

Table.2 半構造化面接で得られた内容の分類結果

質問項目	カテゴリー	回答結果
①幼児期における「子ども理解」	非言語情報による推測	・何をしたいのかわからないのか?等と子どもの気持ちを読み取っていた(a) ・ぱっと見の雰囲気(c) ・怒りそうなときは雰囲気でわかる(b) ・親が表情から一方的に判断していた(d)
	言語情報による推測	・嬉しい時は自分から言っていた(b) ・「いや」と自分で言っていた。言葉で探ることが多かった(g)
	その他	・子どもの気持ちをあまり理解できなかった。みんな楽しそうにしているのになんで泣くのかわからなかった(e)
②児童期における「子ども理解」	非言語情報による推測	・表情で大体わかった(a) ・ぱっと見の雰囲気でわかるようになった(c)
	言語情報による推測	・会話の中で探ることもあります(c) ・言葉で認知を探ることが多かった(g) ・言葉もありより確信を持って対応できた(a) ・言葉で判断していた(d) ・言葉の数が増えて理解しやすくなった(e)
	その他	・現在は人の意見を受け入れない(d) ・経験を通して学んだことも多いと思います(f)
③今までの育児がうまくいかなかった場面	非言語情報による推測	・従順だった子が反抗的な目で見えるようになった(f)
	言語情報による推測	・学校の様子を話してくれなくなった。学校の話聞いても嘘をつく(a) ・自己を悲観的にみるようになった(g) ・黙り込むことが多くなった(b) ・おだてると喜んでいたので今は怒るようになった(c) ・障害を言い訳にするようになった(d)
	その他	・今はまだ困ったことはありません(e) ・親をうとましく思っている(d)
④育児がうまくいかなかった後の対処法	推測ありの対応	・子どもが反抗してきたときは、話しかけても怒ることが分かるため、黙っている(d) ・黙り込んだときには、子どもの気持ちを探るため「アイスを食べに行こう」と誘い、その時にたくさん会話をするようにしている(a)
	推測なしの対応	・本人に自信をつけさせてあげたくて、わざと弟をけなしてしまう(c) ・友人関係についてはあきらめています(a) ・最近ではあきらめもおぼえました(f)
	その他	・将来外国に住めるように英語を習わせたい(d) ・とにかく生きていくすべを学んでほしい(a)

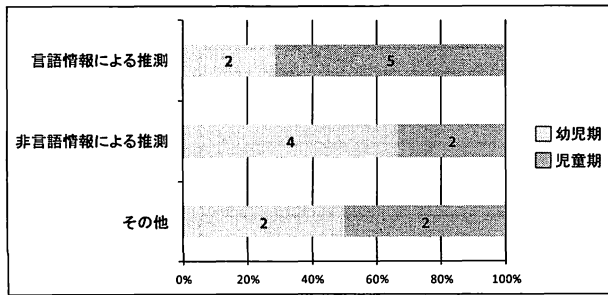


Fig.1 幼児期および児童期の「子ども理解」における情報の利用

語情報及び非言語情報の利用について、その割合をFig.1に示す。

Table.1, Fig.1より、幼児期では、質問①幼児期における「子ども理解」については、子どもの非言語情報による推測を行っていたと答えた母親が多かったものの、「子どもの気持ちをあまり理解できなかった。みんな楽しそうにしているのになんで泣くの

かわからなかった(e)」の回答も見られた。一方、児童期では、質問②児童期における「子ども理解については、子どもの感情を言語情報による推測を多く行っているという結果となった。また、質問③「今までの育児がうまくいかなかった場面」の質問に対しては、「学校の様子を話してくれなくなった」など、子どもとの言語的やり取りや会話に対する困難場面が多かった。

そして、質問④「育児がうまくいかなかった後の対処法」としては、子どもの感情を読み取り、“会話を増やそう”という働きかけをしている母親や、自信をつけさせてあげたいという母親の行動がみられた。一方、あきらめの声も聞かれた。

つぎに、母親の育児効力感得点の平均値およびSDをTable.3に示した。

育児効力感得点は、「子どもへの積極的にかかわりの自信」得点が最も高く、「子どもへの積極的にかかわり

Table.3 母親の育児効力感

	子どもへの積極的にかかわりの自信		子どもを安堵させる自信		子どもを自己統制させる自信		合計	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
a	4.0	1.4	4.4	1.3	6.0	1.0	4.8	1.4
b	4.5	1.0	4.6	0.8	5.3	0.6	4.8	0.9
c	3.8	1.9	3.0	1.8	3.0	1.7	3.3	1.7
d	3.1	0.9	4.0	1.4	3.7	1.2	3.6	1.1
e	6.0	1.8	6.0	0.7	4.7	1.5	5.6	1.0
f	3.5	1.6	3.2	1.0	4.3	2.9	3.7	1.6
g	3.1	0.9	4.0	1.5	5.3	0.6	4.1	1.3
	4.0	0.4	4.2	0.4	4.6	0.8	4.3	0.3

の自信」得点が低い値でなった。また、育児効力感得点が最も高かったのはeの5.6であり、一方、最も低かったのはcの3.3であった。

さらに、ケース的比較を行うために、育児効力感得点が最も高かったeと、最も低かったcのインタビュー調査結果の抜粋をTable.4に示した。cとeのインタビュー結果を比較したところ、育児効力感得点の最も高かったeにおいては、幼児期では表情等の非言語的の情報からの推測が難しかったが、児童期

に言葉の発達に伴い、「子どもの気持ちを理解しやすくなった」と述べている。また、質問3「これまでの育児が上手くいかなかった場面」において「特にありません」という結果であった。一方、cは「ぱっと見の雰囲気で見分ける」ものの「言葉で探る」とも述べていた。また、困難な場面への対応については、これまで上手くいっていたやり方を続けることが特徴的であった。

「子ども理解」と育児効力感の関連を検討するため、

Table.4 面接内容の抜粋

	c	e
① 幼児期における「子ども理解」	今でもそうだけど、ぱっと見の雰囲気で見分ける。このころはアピールが大きくて「仲良くしたい」などの気持ちを相手の子どもを叩くなどして表現していた。	みんなは楽しくやっているのに、なんでこの子はやらないだろうと理解しにくかった。
② 児童期における「子ども理解」	現在もぱっと見の雰囲気で見分けるようになったので、ビビリしているときはほっておく。しばらくすると寂しくなるのか子どもの方からやってくる。	今は言葉の数も増えて、大分子どもの気持ちを理解しやすくなった。
③ 今までの育児がうまくいかなかった場面	昔はおだてると素直に喜んでたのが、今はクールで逆に怒ってしまう。	特にありません。反抗期も未だだと思ふ。
④ 育児がうまくいかなかった後の対処法	子どもに自信をつけさせたくて、弟をわざとけなしてしまふ。前はこれで上手くいっていたのに、今はあまり上手くいかない。	特にありません。

質問4「育児がうまくいかなかった後の対処法」と、育児効力感得点の比較を行った。その結果、子どもを理解する際に推測を働かせた対応を行っているのはa, dの2名であり、育児効力感平均値は4.2であった。一方、推測なしの対応を行っているのはa, c, fの3名であったが、aに関しては推測ありの対応も行っていたため、aを除いたc, f 2名の育児効力感平均値は3.5であった。

考察

1. 幼児期における自閉症児の「子ども理解」

幼児期では、非言語情報による推測を行っていたと答えた母親が多かったものの、「子どもの気持ちをあまり理解できなかった。みんな楽しそうにしているのになんで泣くのかわからなかった(e)」の回答のように、なかなか子どもの気持ちを理解できない困難さも抱えていると推察される。また、「子ども理解」と育児効力感の関連を検討した結果、育児効力感得点の最も高かったeにおいては、幼児期では表情等の非言語的情報からの推測が難しかったものの、児童期に言葉の発達に伴い、「子ども理解」が可能になったと考えられる。このことは言葉の発達に困難性を有している自閉症児に対して母親がMind-Mindednessを働かせて関わることは、通常の子育てより難しいことが推察される結果と考えられる。

2. 幼児期における自閉症児の「子ども理解」

児童期では、質問②児童期における「子ども理解」については、子どもの感情を言語情報による推測を多く行っているという結果となった。本研究の結果より、言語面でのコミュニケーションに困難を有している自閉症児を持つ母親においても、子どもの成長に伴い言語発達が進むと、母親は子どもの感情を言語的情報によって推測する機会が増えていると示された。この結果は、小原(2005)が、母親は子どもの成長により子どもと現実のやり取りを通して育児感情を保っているという研究結果と同様に、自閉症児を育てる母親においても、子どもを理解する際に、子どもの表情といった非言語情報を用いて推測する段階から言語情報に基づいた推測に推移する過程を示している。

3. 「子ども理解」と育児効力感の関連

「子ども理解」と育児効力感の関連を検討するため、質問4「育児がうまくいかなかった後の対処法」と、育児効力感得点の比較を行った結果、子

どもを理解する際に推測を働かせた対応を行っている母親の育児効力感平均値は4.2であった。一方、推測なしの対応を行っていた母親の育児効力感平均値は3.5であった。また、推測なしの対応を行っていた母親の1名は育児効力感平均値が3.3と最も低い値を示していた。この結果は、子どもの言語発達に伴い、言語でのやりとりの中で関わりの困難感を感じるが多くなるが、その際に言葉の背景にある子どもの感情等を推測する母親の方が、育児効力感が高いことを示している。菊野・中野(2010)は、母親が育児不安を生じる原因の一つとして、母親による子どもの心の状態が理解できないことが考えられるとしている。そして、母子関係がスムーズに行くためには、母親が子どもの気持ちをくみ取ることが重要であり、母親が子どもの心を理解できることが重要であるとしている。つまり、子どもの言語発達に伴い、母親が言語情報のみに頼って子どもの感情を推測することが必然的に増えることは当然のことであるが、言語情報だと子どもの内面に感じている感情と表現する言葉に乖離がある可能性は否定できない。思春期の時期になるとその傾向はさらに強くなると考えられる。そのため、言語の背景にある子どもの気持ちを推測しない対応は、子どもの成長に伴った「子ども理解」へと結びつきにくいと考えられる。そのため、推測なしの対応を行っている母親の育児効力感が低くなったと考えられる。

本研究でも、育児効力感が最も低い値を示したcは「ぱっと見の雰囲気で見分ける」ものの「言葉で探る」とも述べていた。また、困難な場面への対応については、これまで上手くいっていたやり方を続けていることが特徴的であった。これは、幼児期からの「子ども理解」に基づいて関わりを行っているため、言語の情報をもとに子どもの気持ちを推測しているものの、現在の子どもの状態に即した「子ども理解」がなされていないと推測される。そのため、子どもの気持ちが上手く推測できず、関わりが難しくなり育児効力感が下がったと考えられる。

4. 自閉症児の母親に対する子育て支援

本研究において、子どもの言語的情報による推測が増加した結果、子どもとの育児場面において、今までの育児のやり方では上手くいかなかったと困難感を感じている母親が多く存在した。清水・金光(2005)は子ども運動面・認知面・言語面における発達が顕著になる結果、親にとって子どもへの対応の困難性が増す、あるいは困難性の質がそれまでと

は変化すると述べており、子どもの言語発達によって、母親は新たな育児困難感を示すと述べた。さらに、小学校高学年頃の子どもは、第二次反抗期を迎え、子どもが身体的・社会的な課題に直面する重大な時期にもあたるため、親のかかわりが難しい時期である。このことから、相互的コミュニケーションに困難さを有している自閉症児の子育てにおいて、子どもの言語発達は「子ども理解」を促進させる要因と考えられる。しかし、児童期以降時に思春期になると、これまでのような子どもに対する声かけなどの対応の仕方ではうまくいかなくなると感じている母親も多く、子どもが母親に対し反抗的な態度を示した際に、これまでの「子ども理解」に基づいた関わりを行った結果、育児場面で困難場面が生じていると考えられる。Key, M.R.(1980) は、人間のコミュニケーションにおいては、言語の役割が最も重要であるといわれているが、その他の表情や動作の果たす役割の重要性も無視できないと指摘した。本研究の結果においても、現在の育児場面において、言語的情報のみを用いて子どもの感情を読み取っている母親の育児効力感が低い傾向が示されたことから、子どもの感情を探る際に言語的側面に頼るばかりではなく、子どもの気持ちを“推測する”という過程が、子どもとの相互交渉場面において改めて重要な作業となると考えられる。その作業の繰り返しが、成長に伴う「子ども理解」へとつながると考えられる。

一方で、幼児期では、非言語情報による推測を行っていたと答えた母親が多かったものの、なかなか子どもの気持ちを理解できない困難さも抱えていると推察され、言葉の発達に困難性を有している自閉症児に対して母親がMind-Mindednessを働かせて関わることは、通常の子育てより難しいことが推察された。このことから、幼児期の自閉症児の母親への子育て支援においては、表情のように非言語的情報の背景にある子どもの気持ちを支援者が推測して伝えるなかで「子ども理解」を促すことが重要と考えられる。また、児童期は、そのため、幼児期に構築された「子ども理解」を、成長に伴った「子ども理解」へと変化が必要であり、「子ども理解」の転換期でもあると言える。そのため、言語情報だけに頼るのではなく、非言語的情報等も用いながら、現在の子どもの気持ちを推測を支援することが臨床心理学的支援につながると考えられる。

引用・参考文献

- 荒牧美佐子・無藤隆(2008) 育児への負担感・不安感・否定感とその関連要因の違い—未就学児をもつ母親を対象に— 発達心理学研究, 第19巻, 第2号 p87~p97
- 藤田久美(2006) 自閉症児を育てる母親への子育て支援：母親の個別相談をもとにした事例的検討 山口県立大学社会福祉学部紀要 第12号 p37~p45
- 菊野春雄・中野香苗(2010) 母親による子どもの心の理解 大阪樟蔭女子大学児童学部児童学科 No.9 p193~p201
- 松平久美子・三浦香苗(2006) 中学生の父親存在認識と情緒自立の発達との関連 昭和女子大学 Vol9 p106~p118
- 森光友美・山口求(2009) 養育期における母親の虐待の予防に関する研究—ベビーマッサージを体験した母親と体験していない母親との比較研究— 日本小児看護学会会報誌, Vol13, No2 p22~p28
- 長屋佐和子(2005) 乳幼児表情写真(IFEEEL Pictures)を用いた母親の情緒応答性の測定：子どもの性差・人数・年齢が与える影響 発達心理学研究 第16巻 第2号 p156~p164
- 日本版IFEEEL Pictures研究会(2005) 日本版IFEEEL Pictures実施マニュアル(未公開)
- 小原倫子(2005) 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連について 発達心理学研究 第16巻 第1号 p92~p102
- 小原倫子(2010) 母子関係における母親の情動認知の発達 愛知江南短期大学紀要 39 p27~p37
- 岡藤円春(2009) 妊婦のない性機能と情緒応答性の関連—インタビューと日本版IFEEEL Picturesを用いて— 日本女子大学人間社会研究科紀要 第15号 p171~p188
- 坂上裕子(2003) 歩行開始期における母子の共発達：子どもの反抗期・自己主張への母親の適応過程の検討 発達心理学研究 第14巻 第3号 p257~p271
- 坂口美幸・別府哲(2007) 就学期前の自閉症児を持つ母親のストレスの構造 特殊教育学研究 第25巻 第3号 p127~p136
- 清水光弘・金光義弘(2005) 共同的関わり視点による母子相互作用の分析 川崎医療福祉学会誌 Vol.15 No.1 237-241

- 篠原郁子(2009) 母親の「子どもの心に目を向ける傾向」の発達的变化について 京都大学発達研究 Vol23, p73~p84
- 武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子・斎藤こずゑ(1985) 言語行動の発達(VII): 母子相互作用における動作と言語: 生後3年間の縦断観察資料の分析 東京大学教育学部紀要 No.24 p61~p80
- 玉瀬耕治・今村友美(2006) 「甘え」と愛着(アタッチメント) 奈良教育学部教育実践総合センター研究紀要 第15号 p39~p46
- 玉瀬耕治・相原和雄(2005) 相互依存的甘えと思いやり, 屈折した甘えと自己愛的傾向 奈良教育大学紀要 第54巻 第1号 p49~p61
- 田坂一子(2003) 育児自己効力感(parenting self-efficacy)尺度の作成 甲南女子大学大学院論集創刊号 人間科学研究編 p1~p10
- 山中淑子・高木修(2008) 未就学児を持つ母親の育児ストレスを軽減させる支援策の検討—母親としての能力に対する自信とソーシャル・サポートに着目して— 日本社会心理学学会第49回大会 p382~p383
- 湯沢純子・渡邊佳明・松永しのぶ(2008) 自閉症児を育てる母親の子育てに対する気持ちとソーシャルサポートとの関連 昭和女子大学生活心理研究所紀要 第10巻 p119~129

謝辞

本研究の実施にあたり, 快くご協力頂きましたお母様方に深く感謝申し上げます。また, 本論文作成に際して, 調査の実施等で協力して頂きました琉球大学の平田和歌子さんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。

付記

本研究は科学研究費補助金若手研究(研究代表者: 金城志麻)の助成の一部を受けて行われました。